

2011年4月2日 土曜日

十勝毎日新聞

Tokachi Mainichi News Web

HOME

ニュース

上士幌「大地の学校」を巣立つ2人が道内で進学

2011年3月19日 14:48



「大地の学校」で生活する児童・生徒ら。前列中央が中城さん、右隣が長根君。後列左が森田さん

【上士幌】町居辺で遠地からの子供を受け入れる「大地の学校」(森田真礼夫さん主宰)を今春“卒業”する2人が、道内にそのままとどまり、進学する。中国出身の長根盛勝君(上士幌中3年)は、中学3年間で上達したスピードスケートの全国大会出場を目指し、釧路管内標茶町の標茶高へ。長野県出身の中城杏菜さん(上士幌高3年)は農家を志し、本別町の農業大学校に進学する。森田さんは「親の近くで進学せず、道内で過ごすのは珍しい」と2人を応援している。

大地の学校は、大阪で働いていた森田さんが移住し、1986年に自宅に開設した民間施設。「農村留学」として児童・生徒を対象に、同年から短期受け入れを始め、95年からは通年で受け入れている。現在は小4～高3の11人が生活。午前5時起床、午後9時就寝(小学生は同8時)の毎日を送りながら小・中・高校に通い、勉強や部活に励んでいる。

父が日本人、母が中国人の長根君は小学時代まで中国で過ごしたが、両親の「日本の文化を学んでほしい」という願いを受け、2008年に大地の学校へ。同時に同学校で義務化しているスケートも始めた。最初は「他の人に1000メートルでも1周差をつけられた」(長根君)ものの、みるみる上達。全道大会にも出場し、全国大会も目指せるまでにタイムを伸ばした。

両親は中国での進学を願っていたが、今年、全国大会出場がかなわなかったことから「全国を目指し、もう一度頑張りたい」(長根君)と決心。スケートで有名な標茶高への進学を決めた。

一方、中2から大地の学校で過ごした中城さんは、長野で学校に通えなかった時期があったことから上士幌へ。当初は農作業や洗濯など「自らの手で行う仕事が多く、嫌だった」というが、「それで気持ちが強くなった」と中・高校に通い続けた。同学校での農作業を通じて「自然が好き。自然と一緒に生活していけるのが楽しい」と農家を志すようになり、農業大学校への進学を決めた。

親元を離れ続けることについて、2人は「高校で結果を出し、親に良かったと思ってもらいたい」(長根君)、「少し不安だが、決心はついた」(中城さん)と話す。将来の夢は「国連難民高等弁務官事務所に入ること」(長根君)、「無農薬の野菜を作り、店もできれば」(中城さん)という。

森田さんは「ここで学んだ生活のリズムを崩さないよう、やるべきことをやっていけば、次につながる道が見えてくる」と2人にエールを送っている。2人は24日に同学校を巣立ち、新たな進学先に向かう。(伊藤寛)